



第50代 理事長
吉田 大樹

継承、そして進化 おもい ~50の情熱を、未来へ~

1. はじめに

社団法人福島青年会議所2013年度理事長を務めさせていただきます、吉田大樹と申します。歴史と伝統ある福島青年会議所を1年間預かるにあたり、ご挨拶をさせていただきます。2011年に発災した東日本大震災、特に原子力災害より福島の様子は一変してしまいました。こんな状況の中だからこそ、我々、青年がやるべき事があります。我々青年が、青年らしい運動をする事で、福島らしい復興、さらには明るい豊かな社会の実現に繋がると確信し、行動をして参ります。

2. 創立50周年について

2013年7月、福島青年会議所は創立50周年を迎えます。50年の歴史は、諸先輩の運動はもちろんですが、地域社会の皆様の協力があったため、継続してこられました。

また、福島青年会議所は50年の歴史の中で、様々な運動をしてきましたが、全て諸先輩の情熱(おもい)



が込められた運動をしてきたと思います。形は変わっても情熱(おもい)は不変であり、50年の情熱(おもい)を現役メンバーで継承し、進化させ、メンバー全員がベクトルを合わせ、今後50年へしっかり歩んで参ります。本年度のスローガンは、そういった過去50年の歴史や情熱(おもい)を、未来の50年に繋いで行けるようにとの願いを込めまして、掲げさせていただきました。

3. 公益法人格取得について

2008年12月に公益法人制度改革が施行され、福島青年会議所はこれまで準備を重ねて参りました。我々の運動は、明るい豊かな社会の実現が目的であり、そのための運動、事業を重ねて参りました。公益法人格を取得することにより、法的にも公益として認められ、より価値のあるものである証として、可能性を最大化するための手段として、公益法人格を取得する必要があると考えております。

また、取得した際の、運営や維持継続方法についても、しっかりと作り上げ、今後継承して参ります。新たな50年スタートするにふさわしい取得の時期であり、2008年から託されてきた責任を、しっかりと全うして参ります。

4. 理事長の想い

我々が愛する福島に、震災以降、大きな変化が起きています。その中でも人口減少については、最も大きな問題の一つと考えられます。現状、何も行動を起こさなければ、衰退していくことは目に見えています。更に、福島の子ども達の環境が大きく変わっ

てしまいました。我々もそうですが、こども達は知らぬ間に、今の環境になってしまっています。明るい豊かな社会の実現には、今後、福島が復興し、永続的に繁栄していくためにも、こども達の力は非常に大きいと考えています。こども達が地域に愛着を感じて頂き、地域の一員として自覚を持ってもらうことで、今後の福島を担って頂く必要があります。我々も小さい頃、先人(地域のおとな達、J Cの諸先輩)に大変お世話になった記憶があると思います。その方々に恩返しをする意味でも、我々は行動し続けなければなりません。諸先輩方の情熱(おもい)を進化させ、現在(いま)我々が出来ることを模索し、魅力ある地域(まち)への進化に繋げ、人口減少を食い止めるべく、まちづくり事業を行います。また、こども達と一緒に我々も成長できるような、ひとづくり事業を行い、福島の復興を担う青少年の育成をして参ります。

5. 本年の事業(組織)について

本年度の組織は、50周年特別室、公益特別委員会、まちづくり委員会、まつり継承委員会、ひとづくり委員会、会員拡大・研修委員会、総務・渉外委員会、と7つの室・委員会を組織し、運動を行って参ります。

まず50周年特別室ですが、創立50周年記念式典、記念誌の発行、記念事業の開催を行います。担当理事を筆頭に、全てのメンバーが所属するようになり、メンバー全員で50周年の成功に向かってまい進します。次に公益特別委員会ですが、公益法人格取得の申請、取得後の維持継続のためのセミナー開催等、いままで重ねてきた公益法人格としての準備を、形にしていく委員会となります。続いてまちづくり委員会、まつり継承委員会、ひとづくり委員会ですが、「わらしっ子塾」を筆頭とする青少年育成事業や、地域を活性化させる事業の開催、またはわらし祭りへの参画等、福島青年会議所が行う事業のほとんどが、この3つの委員会で開催されますので、福島青年会議所の顔となる委員会となります。会員拡大・研修委員会は、文字通り会員の拡大を推進し、会員の資質を向上させるような研修を行う委員会です。最後に総務・渉外委員会ですが、月に1度の例会の設営や、

各種大会への引率を行う等、メンバーむけの仕事を行う委員会です。

それぞれの委員会に伝え



てあることは、継続している事業についても、何かしらの変化を要望しております。それは、スローガンにもある通り、変えてはいけない部分と、変えなければならない部分があるからです。どのように変化し、進化していくのかは、皆様に直接ご覧いただければ幸いです。

6. 会員拡大について

ここ数年、会員の減少が続いています。先輩達が築いてこられた福島青年会議所運動も、会員がいることで成り立っています。昨今は激しい経済環境、生活環境であるため、会員拡大が難しいとの話もあります。しかし、我々の活動は、間違いなく、人のため、地域のために運動をしており、地域に必要とされています。このことに誇りを持って会員拡大を行って参ります。また、会員拡大するうえで、勧誘される側は我々の行動、言動、事業、メンバー個人を評価していると思います。福島青年会議所の魅力、メンバー個々の魅力を発進し、会員拡大を行って参ります。

7. 結びに

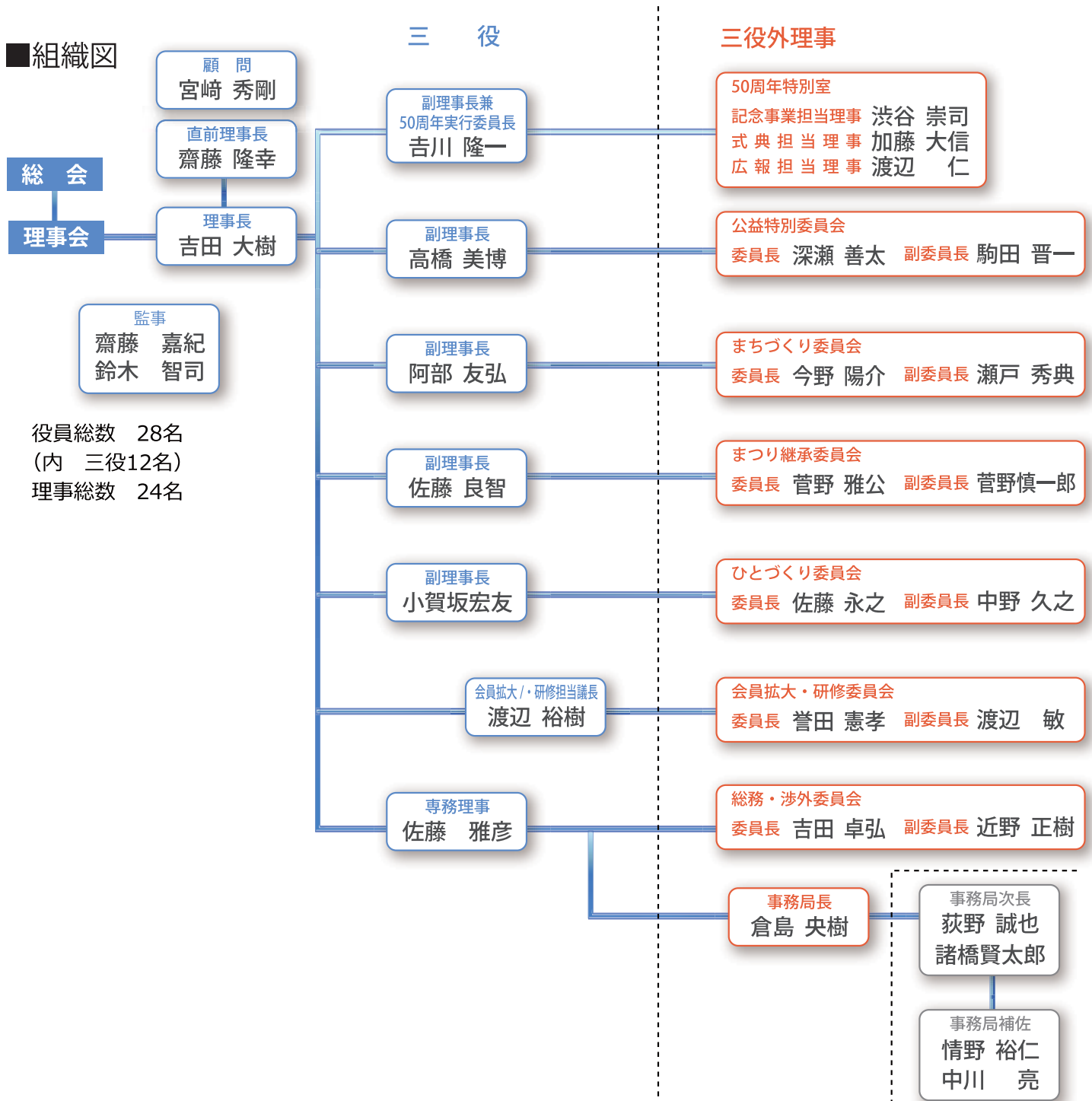
世の中の状況は刻々と変化し、昨今はそのスピードが増しているように思えます。ここ数年を振り返ってみても、100年に一度の不況と言われた、リーマンショック、1000年に一度と言われた、東日本大震災、そして、円高、欧州危機、自然災害(日本を含む全世界)、様々に急激な環境の変化が起こっています。情報伝達のスピードアップ、グローバル化が進み、日本以外で事が起こっても、直ぐに、日本経済に影響を与える時代となっています。我々はこのような世の中でいかに、生きていくか? 次世代、次々世代に何を残していけるか? が大きな課題だと考えます。

企業もそうですが、世の中に貢献するため、世の中の、流れ、変化に対応し、継続していかなければなりません。青年会議所は、会員同士切磋琢磨し、まちづくり事業、ひとづくり事業を通して、いかなる状況にも対応できる、人財の育成の場であると考えます。メンバーの皆様と同様、私自身も今年1年でまだまだ成長させていただきます。

最後に、福島青年会議所 第50代理事長という身に余る重責を与えてくださいました全ての皆様に深く感謝申し上げますと共に、私の持てる力の限りを尽くして職責を全うすることをお誓い申し上げ、年頭のご挨拶とさせていただきます。



■組織図

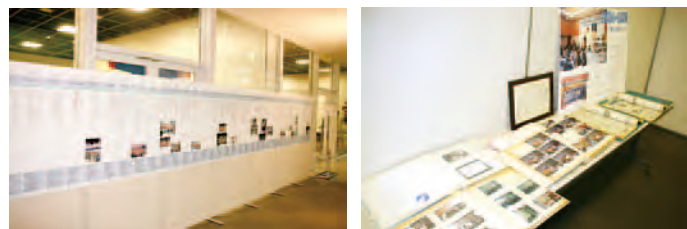


役員総数 28名
(内 三役12名)
理事総数 24名



創立50周年記念式典・記念祝賀会を終えて

50周年特別室 式典担当理事 加藤 大信



去る7月27日、公益社団法人福島青年会議所の創立50周年記念式典並びに記念祝賀会を開催致しました。

今から遡ること50年前の1963年7月27日、この日は福島青年会議所の創立総会が開催された日でした。それから50年という長い年月を超え、この同じ7月27日という記念すべき日に、歴史の重みを感じながら記念式典・記念祝賀会を盛大に開催出来たことは、今日懸命に活動している現役メンバーのみならず、これまでの歴史と伝統を紡いでこられた先輩方にとりまして大きな喜びを感じて頂けたのではないかと考えております。

そして、これまでの我々の活動を理解し、多大なる協力を頂いた地域社会の皆様に対しましても、改めて感謝の気持ちをお伝えするとともに、今後さらなる発展をお誓いする絶好の機会になったのではないかと感じております。

福島駅西口にあるコラッセふくしまにて開催した記念式典は、福島市長 瀬戸孝則様をはじめとするご来賓の皆様、公益社団法人日本青年会議所 東北地区協議会 会務担当副会長 杉渕孝義君をはじめとする来訪JCの皆様、遥々台湾は南投市よりお越しいただいた、陳煥凱会長をはじめとする、姉妹JCである南投国際青年商會の皆様、そして福島青年会議所OB会長である渡邊又夫様をはじめとするOB会の皆様を合わせて、326名という大変多くの皆様に会場にお越しいただきました。またそれに加え、現役として活躍している福島JCメンバーを合わせると約400名という大変多くの参加者でこの瞬間をお祝いすることが出来ました。

また、当日は50周年の歴史を振り返る資料展も同時に開催致しました。大変数多くの貴重な資料を掘

り起こし、その中には台湾の南投 J C 様との絆、かつて姉妹締結をしていたカナダのビクトリア J C 様との繋がり、また先輩方が歩んでこられたまちづくり、ひとづくりに対する情熱を持った各事業に関する取り組みなどがあり、この資料展の開催を通じて私自身、その歴史に触れることが出来ました。福島 J C の歩みが刻まれた 9 m にも及ぶ年表は、正に圧巻の一言でした。

記念式典が終了した後に、福島駅東口のホテル辰巳屋に場所を変え記念祝賀会を開催致しました。祝賀会では公務ご多用の中、福島県知事 佐藤雄平様にも足をお運び頂き、お祝いのお言葉を頂戴いたしました。

50周年を共に祝い祝杯を上げることで、また懐かしい顔を見たりし、思い出話に花を咲かせることで、皆様の笑顔があふれた楽しい祝賀会になったのではないかと思います。アトラクションとして、みやぎびっきの会の皆様に素敵な歌を披露して頂き、会場を盛り上げて頂きました。式典の緊張感のある厳粛な空気とは打って変わって、非常に賑やかな雰囲気でお祝いできるのも、メリハリのある福島 J C の一つの伝統なのではないかと感じた次第です。

この式典を開催するための準備を進める中で、「50年前の認証式、設立総会から、福島青年会議所の式典は非常に格式がある」「式典上手が福島 J C の伝統だから」「きちりと出来て当たり前なのだ」というお言葉、また「式典担当は大変だと思うが頑張れよ」といった励ましのお言葉も幾度と無く頂きました。そういった叱咤激励を頂きながら、決して失敗はできないというプレッシャーも感じつつ、それでもこの大きな節目に運良く担当として携われたのだという喜びを味わいながら、懸命に準備を進めてまいりました。そして先輩方がこれまで築いてこられた素晴らしい式典運営の伝統を汚すことなく、格式ある格調高い、県都福島に福島 J C 有りと思って頂けるような記念式典・記念祝賀会を開催出来たのではないかと自負しております。これが正に、設立当初から培ってきた伝統であり、福島青年会議所ならではの矜持なのであると実感致しました。

そして何より、一切の労を惜しまず、どんな作業

や役割も厭わず協力してくれた素晴らしい仲間がいてくれたからこそその成功であるということは言うまでもありません。

創立より半世紀が経過した今、本年のスローガンにもある通り継承しそして進化する、この想いは今後続いていくであろう60年、70年…次なる大いなる節目である100周年へと向けて受け継いでいってほしい、受け継いでいかなければならない伝統であると確信しております。きっと、その頃100周年を迎える後輩たちには、これまで以上の更なる発展を遂げてほしいということを願ってやみません。

今回の50周年記念式典・祝賀会を皆様と共にお祝いさせていただいたということ、歴史の瞬間に素晴らしい仲間と立ち会えたことに心より感謝し、担当者としての言葉とさせていただきます。

本当にありがとうございました。





2013年度 事業報告

公益社団法人福島青年会議所 2013年度 理事長 吉田 大樹

今年度のスローガンについて

2013年度、公益社団法人福島青年会議所は、『継承、そして進化～50の情熱(おもい)を未来へ』とスローガンに掲げ運動を展開して参りました。創立50周年を迎える年にあたり、諸先輩方の50年にわたる情熱(おもい)をしっかりと継承し、新しい未来へ向け進化する。変えてはいけないもの。変えなければならぬもの。があると思ひ、50年という年回りから、歴史をしっかりと認識し、その場、その時の課題に対し率先して行動出来るよう、進化を続けていきたいという思いを込めました。そんな事により、継続事業でも進化した事業を行うことを前提に各委員会の事業が展開され、また、2011年の東日本大震災から福島の様子が一変したことより、青年らしい運動を通し、福島らしい復興のため、そして、明るい豊かな社会実現を目指し行動して参りました。



創立50周年を迎えて

2013年7月、福島青年会議所は創立50周年を迎えました。50年の歴史と伝統は、諸先輩の運動、行動はもちろんですが、地域社会の皆様の協力があったため、継承してくることが出来ました。地域社会と共にまちづくり、ひとづくり運動してきたからこそ、現在の福島青年会議所が存在すると考えられます。今、我々が運動出来るのは、地域社会の人達のあたたかい理解があったこと、それを実現してきた諸先輩のおかげだということに感謝し、『創立50周年記念式典』、そして、創立50周年特別主催事業『絆』感謝祭



謝祭～Thanksgiving festival 50th anniversary

JCI FUKUSHIMA～』を開催、『創立50周年記念誌』の作成をしました。50周年記念式典、「絆」感謝祭では創意工夫をし、感謝の場、そして、福島復興の一助の場となったと思います。記念誌では、50年という半世紀を振り返り、創立から50年間の歴史をしっかりと記録として残すことが出来たと思います。多くのOB、関係諸団体、地域の皆さまに参加協力して頂き、盛大に開催出来ましたこと感謝致します。メンバー全員がベクトルを合わせ、創立50周年事業を行い、今後の10年、20年、50年後へしっかりと継承し、進化すべく意識高揚の場にもなったと思います。

公益社団法人取得について

2013年4月末に公益社団法人として認定され、5月より公益社団法人福島青年会議所として法人格移行をしたことを報告します。法的にも、我々の運動や事業が地域社会から価値のある団体だと認められました。新たな50年スタートするにふさわしい取得の時期であったと思います。取得に際し、協力頂きました皆さまに感謝致します。

今年行った事業について

我々が愛する福島が、震災以降、大きな変化が起きています。その中でも人口減少については、最も大きな問題の一つと考えられます。現状、何も行動を起こさなければ、衰退していくことは目に見えています。今後、福島が復興し、永続的に繁栄していくためにも、我々が出来ることを模索し、行動をして参りました。

『第1回 暁まいり 福男福女競走』『わらじつくり体験教室』『第44回福島わらじ祭り』～わらじ競走』の開催。福男福女競走では、反響が非常に大きく、開催日の地方テレビ4局でニュースに取り上げられることとなり、「暁まいり」を非常に多くの人に認知して頂くこととなりました。また、浪江からの避難者の方などにも、こういう楽しいお祭りを見ることが出来て本当に良かった。と喜んで頂きました。わらじ関係の事業と共に、福島の宝であります「わらじ」「信夫山」もアピール出来た、福島らしい、福島の活性化に繋がる有意義な事業であったと思います。今年は「東北六魂祭」も福島で開催され、大きく福島を対外に発信できた年になったと思います。今後も回数を重ねるにつれ、復興と共に進化する事業となることを期待したいです。

『「ふくしま未来構想」パネルディスカッション～』の開催。一般市民が福島の未来を変えるきっかけづくりとなることを目的とし、昨年提言させていただいた「新たな福島市のまちづくり」を議題の中心にし、主に福島市民を中心とした広聴者を広く募集し、学生、大学教授、交通関係者にパネリストとして参加して頂き、開催しました。沢山の意見等を集約して、8月末に福島市へ提言書を提出。特に、「国際会議場については福島にあるべきだ」との声も沢山あり、今後の行政の動きに期待したいと思います。何よりも、市民と一緒に福島の未来を考えるきっかけになったことが重要であり、今後も市民の意見を吸い上げ、行政に提言していくのは我々の役目ではないかと思っています。

『福島とうろう流し花火大会』の開催。今年は「未来」の文字をとうろうでかたどりました。明るい未来へ

の希望の花火が3000発打ち上げられ、福島の夜空を照らしました。参加者も例年よりも多く、非常に大盛況に開催することが出来ました。

『信夫山魅力発見！パークランニングレース・花咲か体験』の開催。福島の市街地にある、地形的にも珍しい信夫山の魅力を再発見すると共に、観光資源として再認識してもらうことが出来たと思います。福島のオリジナルであります「わらじ」と共に「信夫山」が全国に知れ渡り、観光の名所となることを期待したいと思います。

協力して頂きました皆さま、参加して頂いた皆さま、協賛して頂きました皆さまに感謝致します。今後、福島が復興し、永続的に繁栄していくためにも、未来ある、こども達が地域(まち)に魅力を持ってもらうためにも、行動し、地域社会に貢献して参ります。

未来のこども達のために思う事、行った事について

福島のこども達の環境が大きく変わってしまいました。我々もそうですが、こども達は知らぬ間に、今の環境になってしまっています。明るい豊かな社会の実現には、こども達の力は非常に大きいと考えています。こども達が地域に愛着を感じて頂き、地域の一員として自覚を持ってもらうことで、今後の福島を担って頂く必要があります。我々も小さい頃、先人(地域のおとな達、J Cの諸先輩)に大変お世話になった記憶があると思います。その方々に恩返しをする意味でも我々は行動しました。

『第26回わんぱく相撲福島LOM大会』の開催。日本の国技を通して礼儀作法を学び、相手を思いやる心を成長させた事業になったと思います。今後も歴史ある大会を継承していければと思います。

『わらしっ子塾～キッズニアで職業体験～』の開催。出発前には「德育セミナー」を実施し、感謝することがいかに大事かについて学んで頂けたと思います。普通の学校や地域社会では体験できない活動や経験をこども達に与え、更なる成長する機会になったと思います。50名の募集定員に対し、741名の応募を頂きました。「わらしっ子塾」が青少年育成事業として地域に密着し根付いてきた証だと思っています。

私たちは、ちょうど子を持つ世代であり、親として、青年会議所のメンバーとして、こども達と一緒に成長できるような、ひとづくり事業を行い、福島の復興を担う青少年の育成を今後も継承して参ります。協力頂いた皆さまに感謝致します。

地域のリーダーとして必要な事とは何

メンバーの皆さんは、各企業、各団体の若手リーダーがほとんどです。各企業、各団体が、地域に根ざし、しっかりとした、経営、活動をしなすことには、地域が成り立ちません。そこで、リーダーの成長が必須と考えられます。我々は、青年会議所活動を通して、自然と学ぶ事も多いですが、次世代を育てる意識を持ち、お互い切磋琢磨し、まずは自らが成長し、会議所内、各企業、各団体のリーダー育成にも努めていかなければなりません。今年、50周年記念事業、沢山の委員会事業、JC運動、活動から、学ぶ場が多い年だったと考えられます。また、『例会時の講演』『スキルアップセミナー』などを通して学ぶ機会があったと思います。学ぼうと思えば感謝が生まれます。そんな心も今後、鍛えていかなければならないと思います。

今後もまずは自らの意識を変え、自らが成長し企業団体が成長する。しいては地域、日本の成長、明るい豊かな社会が実現できることを信じ、行動をしていくことが大事だと思います。

会員拡大について

ここ数年、会員の減少が続いています。先輩達が築いてこられた福島青年会議所運動も、会員がいることで成り立っています。昨今は激しい経済環境、生活環境であるため、会員拡大が難しいとの話もあります。しかし、我々の活動は、間違いなく、人のため、地域のために運動をしており、地域に必要とされていると思います。このことに我々メンバーが誇りを持って会員拡大を行って参り、14名の方に入会して頂きました。協力頂いた皆さまに感謝します。会員拡大するうえで、勧誘される側は我々の行動、言動、事業、メンバー個人を評価していると思います。今後、

福島青年会議所を継承していくうえで、永遠のテーマですが、常に評価されていることを意識し、行動することが必要と思われる。

最後に一言

世の中の状況は刻々と変化し、昨今はそのスピードが増しているように思えます。ここ数年を振り返ってみても、100年に一度の不況と言われた、リーマンショック、1000年に一度と言われた、東日本大震災、そして、為替、欧州危機、自然災害(日本を含む全世界)、様々に急激な環境の変化が起こっています。情報伝達のスピードアップ、グローバル化が進み、日本以外で事が起こっても、直ぐに、日本経済に影響を与える時代となっています。我々はこのような世の中でいかに、生きていくか？次世代、次々世代に何を残していけるか？が大きな課題だと思います。企業もそうですが、世の中に貢献するため、世の中の、流れ、変化に対応し、継続していかなければなりません。青年会議所は、会員同士切磋琢磨し、まちづくり事業、ひとづくり事業を通して、いかなる状況にも対応できる、人財の育成の場であると考えられます。今後も私たちの成長が、地域の成長に繋がることを信じ、行動することが大事だと思います。

公益社団法人福島青年会議所 2013年度 第50代 理事長という身に余る重責を沢山の人の手に支えられて全うすることが出来ました。本当に私を支えて頂きました福島JCメンバーの皆さま、OBの皆さま、地域の皆さま、同志であります各地JCメンバーの皆さま、本当にありがとうございました。2014年度は51年目を迎え、更なる100年に向けてのスタートとなります。今後とも福島JCを宜しくお願い申し上げます。一年間大変お世話になりました。



50周年特別室

昨年の8月より50周年実行委員会が始動しました。今振り返り思うことは「同志」を信じること。そして信じ続けることの大切さを気付き学びました。委員会スローガンを「一人はみんなのために・みんなは一人のために」と掲げました。

当初は自分自身、周年を2度経験していることを委員会運営に生かしていけば良いと考えていました。しかし、月日が経つにつれて各担当理事が悩み続ける日々が続いてしまいました。それは、開催要項がなかなか定まらず方向性が見えなかったのが全ての原因でありました。私が悩み苦しんでいる時は、各担当理事が支えてくれました。そして各担当理事が苦しい時は、みんなで支え続けました。時には激しくぶつかり、時には涙し、そして笑いありと怒涛の一年でありましたが、

しっかりと未来を見据え次代に継承する資料となることを確信しました。

最後になりますが、あらためて50周年という節目の年に設立からの軌跡を振り返ることができたことに感謝し、そしてこの思いを継承し、さらに魅力のある組織へと進化することが新たなステージへの一歩となると確信した一年でありました。

(50周年実行委員長 吉川隆一)



公益特別委員会

公益特別委員会は「福島J Cの未来をつかめ！新たな歴史に名を刻もう」を委員会スローガンに掲げ1年間活動してまいりました。公益法人格への移行が一番の目的でしたが、予定者段階から理事の皆様には多大なるご協力をいただき、無事公益法人格への移行が完了できました。また、毎月理事会前に開催された財政審査会議にも多くの理事の皆様のご参加いただき、円滑な理事会運営に寄与することができたと思います。本年、福島J Cは公益法人格の取得という未来をつかみ、公益元年という歴史に名を刻むことができたのも支えて

くれた委員会メンバー、協力していただいたすべての皆様のおかげです。委員会メンバー一同心から感謝いたします。ありがとうございました。

(委員長 深瀬善太)



まちづくり委員会

まちづくり委員会は、「伝統を継承し進化したまちづくりを～自ら率先して行動する～」というスローガン通りの活動を行って参りました。5月には「ふくしま未来構想パネルディスカッション」事業を実施、福島に思いの深いパネリストお呼びし広く意見を集約、放射線医・科学の拠点として必要なものを提言書として福島市に明示しました。10月には「花咲か体験」及び「信夫山魅力発見！パークランニングレース」を福島J C内外より多くの協力を得て開催。台風一過の秋空の下、参加者は福島市の中心に位置し、福島のシンボルでもある信夫山を老若男女問わず爽やかに走り抜けました。街中にある自然の魅力を満喫した後は、皆で22本の桜の苗木を植樹。来春から桜の名所に自身の植えた桜が花咲くという楽しみが参加者たちに出来ました。

委員会運営では、やる時は皆でやる、楽しむ時は皆で楽しむことを常に心がけてきました。各種大会、例会・委員会(とその後も)出席率は圧倒的だと自負します。決して強制的ではなく、委員会メンバの一人ひとり

が「自ら率先して行動した」結果です。素晴らしい仲間にも恵まれ、1年間厳しくも楽しく活動出来ましたこと誠に嬉しく、また誇りに思います。

委員会を支えて下さった全ての皆様に深く感謝を申し上げます。有り難うございました！

(委員長 今野陽介)



まつり継承委員会

まつり継承委員会では「修練修練修練奉仕友情」を委員会スローガンに掲げ1年間活動してまいりました。2月に事業があるという事で、第1回からフルスロットルで始動いたしました。3月からは、東北六魂祭のため例年より早く、わらじまつり企画検討、各種部会等が始まり、委員会メンバーは息つく暇もなく1年間活動してまいりました。結束力・行動力共に素晴らしく、この委員会メンバーが居たからこそ、1年間活動出来たと心から思います。又、当委員会では、「暁まいり福男福女競走」「わらじ競走」と全体事業として、多くのメンバーに力を借りて成り立っており、お手伝いいた

いたメンバーの皆様には、感謝の気持ちしか御座いません。この御恩を、返しきれたとは思っておりませんが、これを1年の締めくくりとさせていただきます。1年間ありがとうございました。

(委員長 菅野雅公)



ひとつづくり委員会

本年度、ひとつづくり委員会では「こどもたちの未来のために！」をスローガンに一年間活動してまいりました。第26回わんぱく相撲福島L O M大会では、多くのこども達が参加しやすいように簡易土俵、簡易マワシを使用して大会を開催いたしました。おかげさまで例年以上の参加人数があり、大盛況のうちに大会を終了することが出来ました。

また、「わらしっ子塾～キッズニアで職業体験～」では、700名以上のご応募を頂き、「徳育ゼミナール」や職業体験を通して多くのこども達に成長の機会を与えることが出来ました。

どちらの事業についても今までの先輩方の思いを継承し、進化した姿をお見せすることが出来ました。更にこれらの事業は将来の青少年育成事業に繋がって

くものと確信しております。

このような事業を展開し、楽しい1年間を過ごすことができたのも当委員会のメンバー、そして様々なご協力をいただきました皆さまのおかげです。1年間、誠にありがとうございました。

(委員長 佐藤永之)



会員拡大・研修委員会

会員拡大・研修委員会は、「明るく・仲良く・元気よく」の委員会スローガンのもと、福島青年会議所の元気の源であるメンバーの増強を図ってまいりました。初の試みとして月1回の会員拡大会議を開催するなど、新たな活動を取り入れ、全員参加型の活動を目指しました。

また、会員向けのスキルアップセミナー(救命救急)を開催し、家族やふくしまに住む多くの人々の命の大切さを再確認すると共に、人材や事業の質の向上を図りました。

福島青年会議所にとって、「会員→なかま」を増やしていくことは、永続的に取り組んでいかねばならない

課題です。

今後も皆様方のご協力をいただきながら、更に意識を高め取り組んで参りたいと思います。

1年間ありがとうございました。

(委員長 菅田憲孝)



総務・渉外委員会

総務・渉外委員会は「50年目のJ Cをこれまで以上に盛り上げるため、力を尽くそう」をスローガンに一年間活動してまいりました。行った活動としては毎月の例会の設営、各種大会の取りまとめを行い、8月には「とうろう流し花火大会」を実施いたしました。その他にもさまざまな総務に関わる部分を担いました。

2013年度が始まる準備段階から、最終事業となる12月の例会・卒業式まで息つく暇の無い、盛り沢山の1年間を過ごした委員会であったと思います。しかしなが

ら多くの方々に支えて頂き、また委員会メンバーに力を発揮してもらって1年間を乗り切ることが出来たこと、心より御礼申し上げます。1年間誠にありがとうございました。

(委員長 吉田卓弘)



一年間ありがとうございました